

教員養成課程における弦楽器の履修システムに ついての現状と課題

— 広島大学の副専攻生と現職教諭の意識調査報告 —

高旗 健次

(2013年10月3日受理)

Der gegenwärtige Zustand und Aufgaben des Lernsystems von Saiteninstrumenten in der
Fakultät für Lehrerbildung

— Bericht einer Meinungsumfrage der Lehrer und Saiteninstrumente als Nebenfach
Studierenden von der Hiroshima Universität —

Kenji Takahata

Zusammenfassung: Nachdem der Saiteninstrumentenunterricht bei der Hiroshima Universität ein Pflichtfach geworden ist, sind vier Jahre geronnen. Damalige Erstsemester bei der Einführung dieses Systems sind jetzt im letzten Semester. Es interessiert mich, was diese Studierenden über dieses System meinen und wie sie und die Lehrer es begreifen, in den Pflichtschulen Saiteninstrumente vorzustellen, bzw. zu lehren. Das Ergebnis der Umfrage zeigt es, dass die Lehrer und die Studenten eine gemeinsame Meinung haben - die beiden haben auf die Bedeutung der Spielerfahrung beim schulischen Unterricht hingewiesen. Daraus ist es klar geworden, dass die Erfahrung zählt, wenn die Notwendigkeit entsteht, Schüler in das Saiteninstrumentenspiel einzuführen bei Pflichtschulen. Das stellt heraus, dass der Aufbau eines Lernsystems eines von Saiteninstrumenten in der Fakultät für Lehrerbildung notwendig ist. Das Lernen eines Saiteninstrumentes beginnt mit dem "Schaffen" des Klangs. Es fordert sehr viel Mühe, bis man das Instrument endlich elegant klingen lassen kann. Somit wäre es als Saiteninstrumentenunterricht als Nebenfach angemessen, statt eine technische Perfektion zu fordern, auf das Erlebnislernen Gewicht zu legen.

Stichwörter: Streichinstrument, Nebenfach, System, Fragebogen

キーワード: 弦楽器, 副専攻, システム, アンケート

1. はじめに

学校教育における弦楽器の指導の場は、大きく分けて「授業の中のオーケストラなどの鑑賞教育」と「弦楽アンサンブルなどの部活動」が挙げられる。しかし、器楽における課外活動で弦楽器を取り扱っている学校は、全国的にみても一部の学校に限られており、大半は吹奏楽がメインであろう。このような状況の中、現

職の教師は、弦楽活動を実施している勤務校に赴任する場合、否応なしに弦楽器についての知識と技能を生徒に示す必要性が生じる。また、授業の中でオーケストラの鑑賞教育を行う際、アンサンブルの要である弦楽器についての説明は必須である。

そのとき教師が、少しでも弦楽器の体験を自ら習得していれば、どれほどまでに生徒に説得力を持って、より具体的な内容を説明することができるであろう

うか。

広島大学教育学部音楽文化系コースでは、教員を目指す学生に対して、こういった問題を少しでも打破できるように、2010年度の入学生より、1年時に1年間、弦楽器の履修を必修化した。このシステムの確立により、学生全員が最低1年間は弦楽器を実践的に学習することになり、2年次より、各自の選択で弦楽器を継続して履修することも可能となっている。このカリキュラムが確立されて4年が経過し、初年度の学生が最高学年となった現在、学生たちはこの制度をどのように受け止めているのか、また現職の教師は、現場での弦楽器教育について、日々どのように捉えているのか、双方の考えに筆者は興味を持った。

そこで今回、学生と現職教諭の双方にアンケート調査を行い、彼らの持つ意識や問題点を明らかにし、今後の大学での弦楽器指導の示唆を得たいと考えている。

2. 学生を対象としたアンケート調査結果

アンケートは、広島大学教育学部音楽文化系コースに在籍する2年次生(2012年度入学生)から4年次生(2010年度入学生)までで、弦楽器を副科で履修した学生を対象に実施した。実施期間は、2013年の6月であった。回答依頼者数は62名(2年次生=21人、3年次生=23人、4年次生=18人)で、回答者数は50名(2年次生=16人、3年次生=18人、4年次生=16人)と、80.64%の回収率であった。以下、それぞれのアンケート結果を表で示す。

【表1 対象学生の属性】

1-(1) 主専門

| 楽器 | Klav. | Vo. | Hb. | Bb. | Slag. | Komp. | Eo. |
|----|-------|-----|-----|-----|-------|-------|-----|
| 人数 | 24 | 5 | 11 | 3 | 5 | 1 | 1 |
| % | 48 | 10 | 22 | 6 | 10 | 2 | 2 |

1-(2) 副科で履修している弦楽器

| 楽器 | Vl. | Vla. | Vc. | Kb. |
|----|-----|------|-----|-----|
| 人数 | 33 | 8 | 6 | 3 |
| % | 66 | 16 | 12 | 6 |

1-(3) 副科で履修している弦楽器の経験年数

| 年間 | 1 | 2 | 3 | 4-5 | 6-10 |
|----|----|----|----|-----|------|
| 人数 | 18 | 14 | 11 | 4 | 3 |
| % | 36 | 28 | 22 | 8 | 6 |

(4) 将来希望する職種(複数回答)

・高等学校の音楽教員=20名

- ・中学校の音楽教員=16名
- ・大学教員=5名
- ・その他教員(小学校教員, 保育系など)=7名
- ・一般就職=7名
- ・その他の職業(音楽関係, 公務員など)=8名

(5) 広島大学教育学部における弦楽器の「履修システム(1年次に器楽基礎研究I・IIを必修履修→ヴァイオリン・ヴィオラ選択生は2年次以後、弦楽器1から6(授業名)を選択履修, チェロ・コントラバス選択生は2年次以後、管弦打楽器IからVI(授業名)を履修していくこと)」について、もっとも肯定できる項目を6つ設け、以下のような結果を得た。

- ア. 「1年次より必修として」弦楽器に触れられるのがよい。=14人(28%)
- イ. 2年次よりはじまるアンサンブルAの授業の基礎的な技能や知識を身につけることができる。=6人(12%)
- ウ. 専攻以外の楽器の教員と知り合うことができる。=2人(4%)
- エ. 自分の専門以外の楽器の習得が可能になる。=22人(44%)
- オ. 副専攻の楽器が系統的に教育されるので、将来的に役に立つと思う。=5人(10%)
- カ. その他=1人(2%)

(6) 学部の弦楽器「履修システム(1年次に器楽基礎研究I・IIを必修履修→ヴァイオリン・ヴィオラ選択生は2年次以後、弦楽器1から6を選択履修, チェロ・コントラバス選択生は2年次以後、管弦打楽器IからVIを履修していくこと)」について、改善してほしい点を自由記述で訊ねたところ、次のような意見が挙げられた。

- ・2年生でオケに乗せてもらえるが、いきなり難しくすぎてついていけない。
- ・主専攻の楽器によって希望の弦楽器を選択できない点(管打楽器専攻生が低弦を希望できないこと)。
- ・管楽器専攻生も、2年次以降で弦楽器の履修が気軽にできるとよい。
- ・オケの編成をもとに、パートの割り振りが行われるので、自分が本当にしたい楽器ができない場合がある。
- ・履修できる楽器を自由にしてほしかった。(→クラリネット専攻生の意見)
- ・23年度入学生より、1年生の時から低弦を取れる

ように配慮したのはよい。

- ・レッスン内容とオケとの乖離。
- ・アンサンブルがしたい。
- ・1年生での必修履修は楽器に慣れるという点でも効果的。

(7) 広島大学教育学部における弦楽器の「授業内容(レッスンの形態, 時間帯, 方法など)」について肯定項目を6つ設け, 以下のような結果を得た。

- ア. 個人レッスンを中心とした形態がとられている。=12人(24%)
- イ. 一人あたり15分の時間をとってもらえる。=3人(6%)
- ウ. 範奏してもらえる。=7人(14%)
- エ. 個人の能力に合った指導をしてもらえる。=26人(52%)
- オ. 実技試験で, 実力の到達度がわかる。=1人(2%)
- カ. その他=1人(2%)

(8) 学部の弦楽器「授業内容(レッスンの形態, 時間帯, 方法など)」について, 改善してほしい点を自由記述で訊ねたところ, 次のような意見が挙げられた。

- ・「オケに乗るにあたっての必須な」技術を授業で教えてほしい。
- ・非常に丁寧な指導を3年間受けさせていただき感謝しております。特にヴィオラはポジション移動やヴィブラートに取りかかる時期が早かった記憶があるので, もっと基本的な奏法や弓の運び方などを固めていただければ幸いです。
- ・「オーケストラに乗るため」ということもあり仕方ないと思うが, 少し進度が速い気がした。
- ・パートによって良い教本が無い気がする。
- ・最初にもう少し時間をかけて基本的な姿勢, フォーム(特に手の形)について細かく一人一人指導してほしい。また, 弓の使い方とか, 効果的な奏法についても, もっと教えてほしいです。また, 弦を弾く位置についても, もう少し細かくアドバイスをいただけると嬉しいです。あと, 脱力→右腕の重みのかけ方なども, 今よりさらに指導していただけると, 後々のオケの授業でも均質な音を出すことができそうな気がします。ヴィブラートやポジション移動については, 学生同士の間でもっと一緒に練習するような機会があれば, 経験者や器用な人が, できない人にコツを教えることもでき, 皆の上達速度が上がるように

思います。

- ・自分の曲もオケの曲もあり, 自分の曲の進度が遅いので何とかなっているが, 少し負担に感じるときもある。
- ・先生のご負担が増えてしまうかもしれないのですが, 同じレベルの生徒でも, それぞれ違う曲にしたなら, もっと楽しいと思います(実技試験の時には伴奏者の負担が増えるので, 同じものでもいいのですが…)
- ・オーケストラの授業に則したものであってほしい。右手のいろいろな奏法についてももう少しやってほしい。右手がどうしても苦手意識がある。なぜこのボーイングなのか, なぜここでポジション移動をするのか, の原理が知りたい。少しでも知っていれば, 現場で役立つと思う。
- ・基礎をもう少しやってから曲に行くという風にしてほしい。曲が難しすぎる場合がある。
- ・レッスンの時間が短いとよく感じる。人数も多く難しいことは承知の上ではあるが, もっと一人あたりの時間が長くなると良い。
- ・それぞれのレベル似合わせて個人レッスンしていただけるのでありがたいです。
- ・(プロオーケストラメンバーの非常勤の先生に対して)可能であれば他の授業のように, 毎週何曜日の何コマ目か, 教室はどこか固定してほしい。
- ・定期演奏会の曲をもう少し早い時期から見てほしい。個人で曲を練習するのも良いが, ヴィジュアルディの「四季」のように小編成のアンサンブルをするのも楽しかったので, アンサンブルは何回か取り入れてほしい。
- ・試験の時だけでなく, 伴奏者がいるのが理想です(時間的に難しいと思います)。

(9) 学部の弦楽器の授業で取り扱われる「教材(教則本)」について, 肯定項目を4つ設け, 以下のような結果を得た。

- ア. 初心者から段階的な技能を身につけられる教則本を使用している。=42人(84%)
- イ. よく知られた楽曲が, 初歩の段階から多く設定されている。=6人(12%)(うちヴァイオリン=4人, ヴィオラ=1人, チェロ=1人)
- ウ. 学校教育の教材に沿った楽曲が多く設定されている。=1人(2%)
- エ. その他=1人(2%)

(10) 学部の弦楽器の授業で取り扱われる「教材(教則本)」について, 悪い点, ならびに改善してほし

い点を自由記述で訊ねたところ、次のような意見が挙げられた。

- ・専攻以外の楽器だと、どのように練習すれば上達するのか、自分が出す音の中でどれが良い音なのか、などが明確ではないため、練習が難しい。練習の工夫はもちろん、自分で考えて専攻楽器の応用をするが、その方法で良いのか、また他に練習方法があるのでは、と思う。練習方法の引き出しを増やすアドバイスが沢山ほしいです。
- ・オーケストラで取り組む楽曲とレベルがかけ離れているため、練習が大変（ですが、仕方のないことだと思います…）。
- ・定期演奏会の曲には、アルペジオやスケールなど、個人レッスンの曲では追いつかない技術的な部分があったので、個人レッスンからハノンのような練習曲の教材があると助かる。
- ・一度耳にしたことのある曲だと、初めて弾く際に助けになると思う。
- ・基礎（曲ではなくスケールなど）が多い教則本にしてほしい。
- ・技術的な部分が集中的に上達できるようなものあれば良いと思う。
- ・例えばスタッカートの練習、付点、スラーなど、ピアノというハノン、ツェルニーのようなものを、レッスン曲とは別の教則本としてあれば、苦手練習方法が分かるかもしれないと思いました。
- ・巻が一つ上がると、急に難しくなったように感じる。オケとそんなに繋がっていない気がする。
- ・音程の間隔を覚えるための音程練習に取り組む期間をもう少し長くとか、曲を並行してそのような練習もするようにした方が良いのかもしれないと思いました。
- ・もう少し「移弦」を重点的に練習し、指導していただきたいです。オケの授業で一番難しく感じたのは、スムーズな移弦だったので…
- ・（ヴァイオリンの教則本で）基礎練習の方法がもう少し載っていてほしい。
- ・副科や進度の遅い生徒は、オケで使われる楽曲をレッスンでも用いればよい。
- ・ヴィオラのことばかりで申し訳ないのですが、ソロ曲のレパートリーがもっと多いとよいと思いました。
- ・よく聴くフレーズをするのも、オーケストラで役立つと思う。

(11) さらに学部における弦楽器の履修システムとアンサンブル A1（オーケストラ）との関連性について

の質問を行った。

まず、今現在の弦楽器のレッスンは、オーケストラの授業を履修する上で効果がある、また、役に立っていると感じているかどうか、5つの項目で尋ねたところ、以下のような結果となった。

- ア. とても感じる = 19人 (38%)
- イ. まあ感じる = 17人 (34%)
- ウ. 普通 = 7人 (14%)
- エ. あまり感じない = 5人 (10%)
- オ. 全く感じない = 0人

なお、無記入者と「わからない」と回答した学生がそれぞれ1人(4%)ずついた。

この(11)の質問項目で「とても感じる、まあ感じる」と回答した学生に、どういったことが実際のオーケストラの授業で「効果が上がっている」、また「役に立っている」と感じているのか、以下の4つの項目を設けて訊ねたところ、結果は以下の通りであった。

- ア. オーケストラの作品を演奏する上で、最低限の技能をあらかじめ身につけることができる。 = 29人 (81%)
- イ. ピアノ伴奏付きで、あらかじめアンサンブル能力を養うことができる。 = 1人 (3%)
- ウ. 弦楽器同士で、あらかじめアンサンブル能力を養うことができる。 = 3人 (8%)
- エ. その他 = 3人 (8%) (うち2人からコメントあり)

※エ. のコメント内容

- ・自分は弦楽器でオーケストラにのることはなかったですが、弦楽器のことを知ることができ、弦楽器とのアンサンブルで役に立ちました。
- ・オーケストラで演奏する抵抗が少なくなると思うので。オーケストラの曲は、ヴァイオリンの授業曲に比べて難易度が高いので、技術的にはあまり間に合っていないと思う。日本人的な考えですが、「みんなやっている」から「やろう」と思う人も多いと思う。特にオケの授業は必修ではないのに、全員履修するのが暗黙のルールのようなので、少しでも授業で触っていると安心。

また、「あまり感じない・全く感じない」と感じた学生に対して、「どうすれば実際のオーケストラの授業で効果が上がる」、あるいは「役に立つ」と感じるか、自由記述で訊ねたところ、以下のような意見があった。

- ・ヴァイオリンを1年生の時に1年間だけ履修した学生からのコメント：履修期間が(1年間と)短くて、弦楽器でアンサンブルする機会もなかったため、それがあるとまた違ったのかな、と思う。

- ・オーケストラの授業形態に問題があると思う。
 - ・オーケストラの曲と同時進行でソロの曲をやるのは難しいと思う。オーケストラの授業で用いられている曲をレッスンでも取り上げてもらいたかったです。レッスンで弾く曲と、オーケストラの授業で弾く曲のレベルのギャップが大きすぎて、ついていけませんでした…。
- (12) 弦楽器を履修してよかったと感じているかどうか、5つの項目で訊ねたところ、以下のような結果となった。なお、この質問項目より最後の設問まで、2名が無回答であった。
- ア. とても感じる=32人 (67%)
 - イ. まあ感じる=14人 (29%)
 - ウ. 普通=2人 (4%)
 - エ. あまり感じない=0人
 - オ. 全く感じない=0人
- この(12)の質問項目で「とても感じる・まあ感じる」と回答した学生に、どういったことがよかったと感じているか、7つの項目を設け、もっとも自分の気持ちに近い項目ひとつを選択させたところ、結果は以下の通りであった。
- ア. 擦弦楽器という、持続可能な音を引き出せる弦楽器を履修したことで、アーテュレーションやフレージングを学ぶことができたから。=5人 (11%)
 - イ. 弦楽器のさまざまな奏法についての知識を習得することができたから。=11人 (24%)
 - ウ. 弦楽器のさまざまな奏法についての技能を習得することができたから。=6人 (13%)
 - エ. 最終的にオーケストラに参加することで、アンサンブル能力を身につけることができたから (24生の昨年度初心者は、「できそうだから」で回答)。=4人 (9%)
 - オ. 弦楽器そのものの構造や歴史について、知識を習得することができたから。=1人 (2%)
 - カ. 将来、教員になる際に、大いに役に立つから。=4人 (9%)
 - キ. 音楽の世界が広がったから。=15人 (32%)
- ※ 未記入2人。
- (13) 広島大学教育学部を含め、教育学部の教員養成課程に弦楽器の授業は必要かどうか、回答を求めたところ、結果は以下の通りであった。
- ア. とても必要=11人
 - イ. 必要=33人
 - ウ. あまり必要ではない=0人
 - エ. 必要ではない=0人
 - オ. わからない=4人
- どうして「とても必要、必要」と感じているのか、6つの項目を設け、各々の気持ちにもっとも近いものひとつを選択させたところ、結果は以下の通りであった。
- ア. 自分の専攻楽器だけだと、専門性が偏ってしまうから。=11人 (25%)
 - イ. 学校現場で指導する際に必要だから。=6人 (14%)
 - ウ. 学校現場に関わらず、生涯学習で指導する際に必要だから。=3人 (7%)
 - エ. 生涯学習という観点から、将来自分が演奏を続けるかもしれないから。=0人
 - オ. ピアノや声楽、管打楽器と比較して、あまり触れる機会の少ない楽器だから。=16人 (36%)
 - カ. 自分の好き嫌いに関係なく、一度は経験しておくべき楽器だから。=8人 (18%)
- ※ 未記入4人。
- なお、「わからない」と回答した4名に、理由・根拠を自由記述で求めたところ、以下のような意見があった。
- ・私は弦を履修して表現の幅が広がったし、弦の人の苦労などを少し理解できてよかったと思っています。しかし、それが教員養成に必要だったかと問われると、わかりません。弦ではなく、声楽やブラスの管楽器でも学ぶことが沢山あるので、それでも足りると言われればそうかもしれないと思います。
 - ・本講座に在籍するにあたっては、オーケストラの授業もあるため、弦楽器を演奏する者にとっては、それを集中的に学ぶことができるのはとても大切で有難いことであるし、私自身も学ぶことができ本当に幸せだが、弦楽器を実際に弾くことができなくても、音楽の授業を行うことは可能であるため、必ずしも弦楽器の授業がなくてはならない、ということにはならないのではないかと考えたため。楽器を経験することで、それだけ知識として教授することができるのも確か!!
 - ・専門以外の楽器が学べるメリットがある一方、様々な楽器 (Pf, 吹奏の楽器, 声楽etc) を並行して練習していく大変さがあり、どちらが勝っているとは言い難いから。
 - ・自分の役に立つかどうかは、将来になってみないとわからないから。

(14) 最後の設問として、弦楽器の副科履修システムや授業方法、使用する教材や教則本など、日頃気がついていることを自由記述で訊ねたところ、以下のような意見があった。

【肯定的な意見】

- ・副科でもヴァイオリンにふれる機会やオケの一員として初心者でも参加できることは、とてもよい経験だと思っています。練習量や負担という意味では、厳しいときがあったり、自分の中でのウエイトも軽いときがあったりなど、いつでも肯定的に弦楽器を頑張れるわけではないのですが、この学科に来て「様々な楽器にふれられる」という選択肢は、私にとってはメリットになっています。
- ・このシステムがなければ、弦楽器に一度も触れることがないまま卒業してしまうので、履修できて良かったです!! とても良い経験になっています。
- ・弦楽器を個人で基礎から教えていただけるのでありがたいです。
- ・「四季」楽しかったです。アンサンブル続けて欲しいです。
- ・授業などで機会が無いと普段は触れることもないので、とても感謝しています。実際に演奏する事で、作曲する際にも役立つと思います。
- ・チェロやコントラバスなどの低弦をやってみたのですが、オケの編成やレッスン、人数等の関係で履修できなかったことが残念です。弦楽器自体は一度は経験しておくことで、アンサンブルをする上でも一緒に演奏している仲間への理解が深まるという点と、教員になる際に役立つだろうという点で、必修になって良かったと思います。
- ・履修している人が、弦楽器の練習が大変で専門で練習する時間がなかなかとれないと言っていたのが気になります。1、2セメスターで必修なのは、とてもありがたかったです。

【要望や否定的な意見】

- ・2年からオーケストラにのるのは無理がある。
- ・特にありませんが、どの弦楽器にも1人は専科がいてほしい。副科の人が仕切るのは、少し難しいと思う。
- ・合奏形態も楽しいけど、合奏に入る前にその曲の個人レッスンがないと遅れがでてしまう。
- ・弦楽器の授業は、オケにも役立つし、声楽やピアノにも音楽性の面で活かせることがあるのでとても良いと思います。いろいろな楽器を演奏してこそ、音楽性は優れたものになると感じました。人

数が足りないので必ずオケに乗るということは仕方ないと思いますが、弦楽器は特に、練習時間(パート練習など)が長くて、他のことに支障が出る人もいると思うので、もう少し簡単な曲を取り扱ったほうがよいのでは…と思います。

- ・オーケストラに弦でやる可能性があるため、授業をとってバイオリンを勉強させてもらっているのですが、最後のテストで、1人ずつ弾く時の曲が、少し負担が大きい気がします。でもテストがないと練習もおろそかになりますよね…。仕方ないとも思います。
- ・二重奏くらいにした方が、練習しない人にとっては練習するきっかけとなるし、アンサンブルの練習にもなると思う。ソリストになるわけではないので、アンサンブル重視の内容の方が、より実践的だと思う。
- ・教音のシステム上、オーケストラに乗れない楽器を専攻している学生は必然的に弦で乗らねばならず、弦の授業も取らねばならなくなる。授業自体は個人の進度に合わせてしっかりと教えてもらえるため、とてもよいのだが、どうしても個人の曲を優先してしまうため、オケの曲の練習がおそろかになってしまう、という現状がある。そのため、逆に個人の負担が増えてしまい、悪循環がおこっているかもしれない。
- ・楽器が足りない等の理由で履修できないのは避けて欲しいと思いますが、一教員にかかる負担の大きさを考えると何とも言えませんね…。
- ・役に立たないわけではないが、弦楽器初心者がいきなりオーケストラで難曲を弾くのは、自分ができる範囲で、とはいっても正直キツイ。吹奏楽のように初心者だけのアンサンブルがあると楽しいかもしれない。

3. 現職教員を対象としたアンケート調査結果からみた、弦楽器の現状

ここでは、2013年6月29日に開催された免許更新講習の際、現職教員18名に対して実施したアンケート結果について述べ、弦楽器指導に関する現状についての分析を行う。

【表2 現職教員の属性】

2-(1) 勤務校の種別

| 校種 | 小 | 中 | 高 | 小中 | 中高 | 高・他 | 他 |
|----|----|----|----|----|----|-----|----|
| 人数 | 6 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 4 |
| % | 33 | 16 | 11 | 6 | 6 | 6 | 22 |

2-(2) 勤続年数

| 年数 | 5年以内 | 10年以内 | 15年以内 | 20年以内 | 25年以内 | 30年以内 |
|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 人数 | 2 | 9 | 1 | 1 | 4 | 1 |
| % | 11 | 50 | 6 | 6 | 22 | 6 |

2-(3) 主専門

| 専門 | Vo. | Klav. | Klav./Vo. | Hr. | Tp. | なし |
|----|-----|-------|-----------|-----|-----|----|
| 人数 | 2 | 11 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| % | 11 | 61 | 6 | 6 | 6 | 11 |

2-(4) 副専門 (大学のカリキュラムの中での)

| 副専 | Vo. | Klav. | Fl. | Fl./Vc. | Hr. | Vl. | なし |
|----|-----|-------|-----|---------|-----|-----|----|
| 人数 | 3 | 5 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 |
| % | 17 | 28 | 11 | 6 | 6 | 16 | 16 |

2-(5) 副専門楽器経験年数 (指導経験年数は除く。また、2楽器にまたがる場合、経験年数は合算とした。)

| 年数 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 20 | 無回答 |
|----|---|---|---|---|---|---|----|-----|
| 人数 | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 1 | 2 |

(6) 弦楽器の学習経験について

ここでは、社会人になって以降も含めた、弦楽器の学習経験についての有無について訊ねた。18名中7名が経験者 (うち1名は箏) で、そのうちオーケストラの擦弦楽器の経験者は6名であった。学習場所について複数回答で訊ねたところ、大学のカリキュラムの中に弦楽器の授業があった者が5名で、勤務校やホームレッスン、ヤマハのグループレッスンでの経験は各1名ずつであった。このことより擦弦楽器の経験者は、過半数には満たず、学習経験者は、大半が大学のカリキュラムの中で学習したことが分かる。

またその学習方法としては、専門指導員による、グループレッスンや個人レッスンが大半であった。使用する教材としては、基礎練習の入った既存の教則本を使用していた。実際に指導を受けた総時間は、さまざまであり、15分以上30分以内が1名、30分以上1時間以内が4名、また、大学の1コマをフルにを使って指導を受けていた者が1名いた。

(7) 学校現場における弦楽器指導について

ここでは、オーケストラの擦弦楽器関連の指導について、18名全員に訊ねた。実際に行っている人は18人中8名で、鑑賞教材の際に行っている者が6名、弦楽クラブ活動など、部活の指導が2名、演奏会があったときのみ、指導するものが1名という結果であった。なお、今回の調査では、弦楽合奏クラブを持つ学校に勤務している者、また、勤務校に音楽科の「合奏」という授業の中で、弦楽器を取り扱っているところがある者が、各1名ずついた。この結果から、いかに弦楽

活動が学校の中で浸透していないか、ということが今回の調査では判明した。鑑賞教材には必ずと言ってよいほど、オーケストラを中心に弦楽器の内容が紹介されている。しかし、弦楽器の指導を行っていない教諭が10名も存在したことは、大変驚愕した。

また、指導経験者に対して、指導の際に困ったことを複数回答で訊ねたところ、筆者の予想通り「経験がないため範奏できない」がもっとも多く理由で、次いで「具体的な奏法や楽器そのものの説明ができない (4名ずつ)」が挙げられた。また「学校が楽器にない」といった現実的な課題や、「生徒の音程が悪すぎる」といった、弦楽器の技術以前に、音高識別能力を問題とする意見も挙げられた。

なお、鑑賞教材における弦楽器の指導を行っている者が、指導の際に気をつけている点や工夫している点としては、次のようなことが挙げられた。

- ・興味をもてるように、楽器の音色や各楽器の共通する点、違う点について説明するようにしている。
- ・範奏はできないが、ひくまねをしながら子どもたちに見せ、子どもたちにもまねをさせている。
- ・教科書に書いてある弦楽器の説明はして、鑑賞用DVDでオーケストラの演奏を聴いています。
- ・弦楽器を演奏できる人をGTに招く。またできるだけ楽器に触れるなど、「体感」できるように工夫する。
- ・(特別支援の教諭より) — 音の出し方の特徴が分かり、楽器の音が聴き取れればよいと思っている。
- ・あまり細かいことは説明せず、わかりやすく簡単に、わかる範囲の裏話などを交えて。

また、弦楽器を取り扱うクラブ活動 (など) での指導についての注意点、工夫している点については、以下のような回答があった。

- ・音楽の授業で取り扱われる「合奏」の授業での、オーケストラの練習時間は少なすぎるため、合奏にはなかなかならない。管弦楽の楽譜では無理なため、吹奏楽版や教諭が編曲した初心者用の弦パート譜 (メロディばかりだったり開放弦ばかりだったり) を合わせた。生徒は喜んで練習するので、定期演奏会では保護者の方が感動して泣いてくれたりした。それを見て、習い始めた親もいた。

(8) 弦楽器の受講経験に対する意識

これらの教諭に、現職の教員になる前に弦楽器の指導を受けていてよかったと感じるかどうかが訊ねたところ、感じない教諭は「なし」で、8割は「とてもよかった」と感じ、残りの2割も「まあ感じる」という結果となった。その理由として7つの項目から一つだけ選択してもらったところ、その選択肢はさまざまであった。以下にその結果を示す。

- ・(ア) 擦弦楽器という、持続可能な音を引き出せる弦楽器を勉強したことで、アーティキュレーションやフレージングを学ぶことができたから(1名)。
- ・(イ) 弦楽器のさまざまな奏法についての知識を習得することができたから(1名)。
- ・(ウ) 弦楽器のさまざまな奏法についての技能を習得することができたから(2名)。
- ・(エ) オーケストラに参加することで、アンサンブル能力を身につけることができたから(1名)。
- ・(カ) 教員になる際に大いに役に立っているから(1名)。

※(ア)と(エ)に複数回答した者が1名いた。

(9) 音楽の教員に対する弦楽器経験の必要性

ここでは、音楽の教員に対する、弦楽器経験の必要性について18名全員に調査したところ、ここでも8割以上の教諭が「とても必要・必要」と回答した。なお、2名からは「あまり必要ではない」との回答があり、「必要ではない」や「わからない」と回答した者はいなかった(無回答者は1名)。

「とても必要・必要」と回答した者に、その理由を5つの項目から一つだけ選択してもらったところ、最も多かったのが「鑑賞教育を行ううえで必要だから(7名)」で、次に「ピアノや声楽、管打楽器と比較して、あまり触れる機会の少ない楽器だから(6名)」が次いで多かった。またこの6名の回答者のうち1名は、このアンケート実施当日の免許更新講習の際に行った、ヴァイオリン・ヴィオラの体験学習の際に「触れてみてとても楽しく嬉しかったから」とのコメントがあった。

なお、「あまり必要でない」と感じた者2名の理由としては、「授業で扱う機会がほとんどない」といった回答や、「今現在、指導することになったため強く必要性を感じているが、学校によっては演奏経験がなくても、最低限の音楽教育は出来るのだと思う。ただし【必要】とは思わないが【絶対に経験しておいた方がいい】と思う」といった意見が挙げられた。

(10) 広島大学の1年時における弦楽器履修の必修化について

弦楽器の履修を1年間必修化したことに対する意見を、現職の教員に対して求めた。3つの設問に対し、複数回答で回答を求めたところ、実に1名を除く17名が「あまり触れることの少ない弦楽器を経験できることはよい」と、「将来現場に立つにあたり、弦楽器を勉強していると、理論と実践指導のうえで説得力があるのでよい。」といった2つの設問に複数選択しており、先ほどの「弦楽器経験はあまり必要ではない」と回答していた2名も、ここでは肯定的な意見を選択していた。

唯一、否定的な項目「授業での歌唱指導やピアノ伴奏、課外活動での吹奏楽指導など、弦楽器以外にやることは沢山あるので、弦楽器については必要ない」に回答した者からは、以下のようなコメントを記した。

- ・弦楽器を体験するとよいと思うが、吹奏楽に使われている楽器を学ぶ方が実践に役立つと思う。弦楽器は継続して学ばないと技術が身に付きにくく感じる。体得するのに時間がかかると思う。自分はピアノとヴァイオリンを学んだが、管打楽器も少しでよいので学ばよかったですと思う。苦手意識があり、困った場面がしばしばある。

このコメントは、言い換えれば「取りあえずは経験しておくことが大切である」といった訴えであることが分かる。

(11) 現職教員の立場から

最後の設問で、弦分野を指導するうえで現役学生に対してのアドヴァイスや意見等、自由記述を設けたところ、以下のような意見が多数あげられた。

- ・やはり指導するにあたって、自分自身が「経験」をしておくべき。楽器の構造や主な奏法を知っておくと、鑑賞教材の指導などで、より詳しく子どもたちに教えることができると考える。オーケストラの中での役割や位置づけ、管楽器との違いなどを理解させるのに、経験があると、よりいっそうの説得力があると感じた。
- ・ピアノ専攻生で、副科の楽器経験がないため、知識がなく困っている。卒業して少しずつ、知ったり触れたりした。実際に弦楽器指導ができていないため、DVD鑑賞をしている。
- ・弦は「歌う」ということがとてもリアルに分かる楽器であると同時に、凄みもある。「音楽の素晴らしさ」という点では、ピアノなどに引けを取らずに感じやすい楽器である。自分なりに何か1曲、レベルの高低は気にせず、好きな曲を修得

できるとよい。

- ・さまざまなメディア（CDやDVDなど）による、鑑賞では伝えきることのできないことを、生徒の目の前で演奏して伝えることが、感性を磨くことに繋がると考えている（実際にどのような体の動きで音に変化が表れるか、など）ため、これらを身に付けていられたらよいと思う。
- ・私の大学では、弦か管を一年時に選択し、そのまま三年次まで継続するシステムだったため、どちらも経験することは必要不可欠だと思う。現在まで、特別支援学校での経験でしかないが、子どもはどこでどんな風に興味を示すか予測不可能だ、と日々感じる。「指導」という意味から考えると多少違ってくるが、自身が経験していれば、聴かせてあげることでもでき、伝えることもできるのに…と思う場面がある。音楽の教員とは「次の世代へ音楽を伝えていく」という仕事なのだと思最近になって思い始めている。
- ・音大のピアノ科だったため、ピアノしかやってこなかった。勤務校に音楽科があり、ピアノ、声楽、管弦楽器が必修だったため、羨ましく思っていた。広島大学OBの同僚は、それぞれオーケストラの経験があり、自分の経験不足を恥じてチェロを習い始めた。私は、合唱や独唱、独奏の伴奏をすることも多いのだが、音のイメージは自分の経験から得ることが多いと感じる。ピアノのレッスンでも「歌ってみればわかる」とか「オーケストラを聴きなさい」等とよく言われたが、実際弓で音を出してみないと分からないことは、沢山あると思う。従って、幅広く音楽を学び、経験することはとても大切なことで、継続していくべきだと思う。
- ・生徒の中にも、私のように、バイオリンなどに興味はあるものの、触れたことのない者が多くいるはず。そのような生徒の知的好奇心に応えていけるようになればよい、と考える。
- ・私はピアノと金管楽器をやったことがあるおかげで、子どもの前で生の演奏を聴かすことができ、そのたびに子どもたちの顔が輝く様子が見られたり、授業後にいろいろな質問をしてくれたりと、興味を持つきっかけづくりができていっていると思う。後は弦楽器をやっておけば…という後悔があるので、大学の授業での必修化に関してはとてもよいことだと思う。
- ・是非、弦楽器に触れる機会を教壇に立つ前に経験してほしい。このことは、自身の音楽に対しても勉強になり、たとえ弦楽クラブがなく、合唱や吹

奏楽の指導をすることになっても、十分役に立つ。「ここはコントラバスの音色のように」とか、「弦楽合奏のようなイメージで」など、自分の音楽に対するイメージやボキャブラリーも増えると思う。

- ・現場では、楽器のメンテナンスが教員に全て、任せられる場合が多いため、その方法を知っておく必要がある。
- ・今の子ども達は、独奏（例えばリコーダーや鍵盤ハーモニカ）に関してはよくやっているが、アンサンブルの経験をあまりしていないので、弦の柔らかい音の響きでのアンサンブルなどさせてあげたいと思う。以前の自身の経験から、町主催のバイオリン教室など、行政が力を入れて下さると、盛んになると感じる。
- ・以前、著名なソリストを迎えて同じ舞台に立つ機会があり、真横で鳴っているその音と空気の振動にとっても感動した。やはり、生で触れる本物の音はスゴイ！ということで、広島大学の弦楽器の履修システムは、絶対に素晴らしいことだと思う。

4. まとめと考察：学生と現職教員のアンケート結果から

今回の双方の調査をもとに、学生と現職教員との間で共通して多くみられた意見は、指導に際して経験の重要性の指摘である。指導の必要性に迫られた時には必ず経験がものをいう、ということが見えてきた。特に現職教員からは、その実体験から、さまざまな楽器を経験しておくことで説明に説得力が増し、生徒の知的好奇心を伸ばすことや、感性を引き出すことが可能になるといった意見があったことから、その必要性は顕著であろう。また、94パーセントの教員が広島大学の弦楽器の履修システムに肯定的であること、また8割以上が弦楽器経験の必要性を説いていること、さらに96%の学生が、弦楽器を履修していてよかったと感じており、学生の92%が「教員養成課程に弦楽器の授業は必要」と回答している。その理由としては「弦楽器に対する技能や知識の習得」といった直接的なものから、学校現場において「音楽」というカテゴリーの中で、弦楽器が他の題材や楽器に与える相乗効果も与えることがある、といった間接的な理由を述べていることから明らかである。

以上のことから、教育学部での弦楽器履修システムの確立は、求められるべきものであることが明確となった。ただし一部の学生からは、肯定的に捉えつつも「弦楽器の経験がなくとも音楽の授業を行うことは

可能であり、その他の専門内でもやることが沢山あるため、必ず弦が必要かどうか疑問を抱く」といった、目先の形式的な捉え方をする者もいた。これに対してはおそらく、彼らは実習前か、あるいは実習に行ったとしても経験が浅いため、今後長期にわたってさまざまな現場で教壇に立つ際には、さまざまな楽器を体験しておくことの必要性を痛感する時が来ると考える。

しかし今回の調査では、オーケストラの授業に副科の学生を弦楽器で乗せるためには、個人指導で使用する楽曲と、オーケストラの楽曲との難易度の差の問題が浮き彫りとなった。オーケストラの楽曲にはポジション移動が多く盛り込まれているため、たとえ1年間で最低3rdポジションまで習得できたとしても、いきなりハイ・ポジションの作品に向き合うことは、一部の学生のアンケート結果からもわかるように、相当な負担を伴うことは明らかである。彼らが指導体制として望んでいることは、2.の(7)のアンケート結果からも明らかのように「個人指導」であるが、それだけでは時間的にも指導教員の労力にも限界がある。そこで、指導方法として求められることは、能力別にグループに分け、各々の能力に見合った個人、時にはグループ指導を行い、適宜アンサンブル作品を取り入れながら、技術面とアンサンブル能力の構築を積み上げていくことが大切であると考えられる。

専攻生のように完璧を目指して弾けるようになることが目的ではないため、教員養成課程に在籍する副科の学生にとって、最終的に必要なことは何か。それは、弦楽器がリコーダーやピアノとは違い、音を「創る」ところから始めなければならず、そこに到達するまで

の困難を経て優美な音色を奏でるまでいかに、大変な労力を要する楽器であるのか、といったことを、副科なりに生徒の前で説得力を持って示すことができる教員として、大成していくことではないだろうか。音を持続させて奏することの不可能な打弦楽器であるピアノを長らく一人で学習してきた学生などには特に、擦弦楽器を経験することで「運弓によるアーティキュレーションのあり方」や「アンサンブル活動を通しての楽曲分析や協調性」を、身につけることが可能となる。このことは、声楽やその他の器楽専攻生においても、相互的に生かされるであろう。弦楽器には加えてヴィブラートやトレモロ、ピツィカートなどの特有の奏法も多く存在し、それらが情景や心情を表現するための、音楽的な表現に結びついていることも、経験していれば具体的に解説することが可能である。副科なりに苦勞して積み上げてきた過程を生徒の前で説明し、場合によっては実際に演奏してみることで、プロの奏者による完璧な演奏よりも、いっそうのインパクトを生徒達に与えるであろう。

実体験を伴った説得力のある指導には必ず、生徒の興味を引き出す要素があると考えられる。そのために、教員養成課程における副科を対象とした弦楽器指導のあり方としては、技術的な完璧を求めず、体験的学修にウエイトを置く活動を展開していくことが求められるものである、といえるだろう。

※ 本調査の一部は、2013年5月18日開催の、平成25年度日本教育大学協会全国音楽部門大学部会、第38回全国大会第2分科会において口頭発表した。